

おたふく風邪

きなき 感染症を 知る

◆36◆

県感染症情報センター

のため、医学的には「流行性耳下腺炎」という病名です。通常は1〜2週間で軽快し、感染しても症状が現れないこともある

のため、医学的には「流行性耳下腺炎」という病名です。通常は1〜2週間で軽快し、感染しても症状が現れないこともある

後遺症が残る場合も

りますが、無菌性髄膜炎(すいまく)炎をはじめ、髄膜炎、難聴、卵巣炎、睪(すい)炎などの、さまざま合併症を引き起こす場合があります。

予防接種推進が必要

りますが、無菌性髄膜炎(すいまく)炎をはじめ、髄膜炎、難聴、卵巣炎、睪(すい)炎などの、さまざま合併症を引き起こす場合があります。

りますが、無菌性髄膜炎(すいまく)炎をはじめ、髄膜炎、難聴、卵巣炎、睪(すい)炎などの、さまざま合併症を引き起こす場合があります。

りますが、無菌性髄膜炎(すいまく)炎をはじめ、髄膜炎、難聴、卵巣炎、睪(すい)炎などの、さまざま合併症を引き起こす場合があります。

流行状況となりまして。その後、平成5年のMMRWワクチン中止とおたふく風邪関連ワクチンの接種率低下により、流行は再び増大傾向となり、以後およそ4〜5年の周期で流行が見られています。昨年の流行の前には、平成22年〜23年に流行しました。

は、世界中でさまざま傾向にあります。欧米では、公的に2回接種を行っていても、高校生や大学生の

集団でおたふく風邪流行の再燃が起きています。そのため、有効性、安全性ともに高いワクチンの開発が期待されています。

▽予防接種の推進 おたふく風邪の予防接種は、定期予防接種(※注)のMRワクチン(麻しん・風しん混合ワクチン)と同時期の2回接種が適切とされています。

現在のおたふく風邪ワクチンは、安全性に関して、中止となったMMRWワクチンと基本的に同等と考えられ、無菌性髄膜炎を発生する可能性が低いです。

町村で全額公費(自己負担なし)となっており、(県感染症情報センター) 第2木曜日掲載

奈良県における流行性耳下腺炎の発生状況

